西金堂ハ天平六年正月十一日光明皇后御母橘（タチバナ）氏の為（タメ）にたて給ふ（水鏡）なぞる釈迦如来二菩薩羅漢（ラカン）神王（ジンワウ）等の像どもをつくらせらる（釈書）此像ハ印度健駄羅（ケンダラ）國王の后あり生身の観音をおがミ奉らんことをねがひしとちかひ給ふに御枕上（マクラカミ）に人来りて日本の國王の后（キサキ）光明子（クワウミヤウシ）こそ生身（シヤウジン）の観音まくゆしましと告なりしとおぼえ給ひてたゞ夢ハゆめぞとけさ陛下に奏しけれバ群議（グンギ）してさへこゝろざしへにわるど后（キサキ）又ゆるし給ふべきにあらねども只そのかくいらばいかゞしまさんにハ志じくそし巧匠（カウセウ）と日本國にぞわたしける巧匠仕士にておぼくかくと奏聞を経（へ）バ光明皇后ハ我母君の御為に佛を作らせんさいはひ此刻（きざミ）てえたるもの則釈迦の像なり眉間の玉を入之とぞ申しける像をのぞミしに光明とてらし給ひしかば信仰（シンカウ）胸（ムネ）にミち感涙袖のあまりてやゝしばらく有りけれ玉をば入ざりけるにこゝに当堂のなぞる是がハ光明皇后みづからちがひハなし奉ると縁にかつてありけらし（御順礼記）

又自然涌出（シゼンユジユツ）の観音の像（栄花物語）当堂にあり柳沈像（ソモクザウ）ハしりし伝法院（デンバウイン）の修円僧都（シユヱンソウヅ）としてありけるが寿広已講（ジユクワウイカウ）と相ぐしして尾張（ヲハリ）の國よりのぼりましゝ賀茂坂といふ所のとほりの池のほとりにて已講ゝゝと呼（ヨブ）あゝわい誰ならんやとかへり見れども人もなし又めぐるにあれをしけど件（コジ）の池を見るにいとあやしくて池にのぞミてみれバ池の中に十一面観音の像いかにもあざやかにうかめられけりいかにもしてとり上（アゲ）皆（ミナ）負（オ）ひ奉りてぞ南都にかへりくる先（セン）南大門にこゝへ奉りていづれの堂にかおさめ奉らんやと大衆僉議（センギ）して金堂にはけふしらべ入奉らんとせ